

2018

ライブラリー

目 次

変わる大学図書館	経済学部分館長 金田 耕一…	2
地下書庫をめぐる冒険	分館運営委員会 副委員長 根本 志保子…	4
おすすめ本	分館運営委員会 運営委員 渡邊 賢一郎…	6
図書館で偶然の出会いを	安藤 至大 教授…	8
おすすめ本	奥田 智 教授…	10
私のおすすめの本	橘 光伸 教授…	11
2018年度のまとめ……………		13
平成 29 年度図書館ガイダンス（基礎研究）アンケート結果……………		16

変わる大学図書館

日本大学図書館 経学部分館長

金田 耕一 教授

(政治学)

昔も今も、そして将来も、教育研究機関としての大学には図書館がかならずあります。図書館のない大学なんて考えられません。しかし、大学図書館のあり方は時代とともに変わっていきます。

かつて図書館の第一の役割は、できるだけたくさんの本を収蔵することでした。本がまだ貴重なもので、特に海外の書籍や古い資料を手に入れることが難しかった時代には、多くの本が集積されている図書館は、教員が研究したり学生が勉強したりするためにはなくてはならないものでした。いまでも大学図書館はその蔵書数で評価されることがあります。経済学部分館の蔵書数は約 43 万冊ですが、日本大学全体でみると約 530 万冊で、日本の大学では第 4 位（1 位は東大）です。

大学図書館のもうひとつの役割は、学生さんに勉強するための場所を提供することです。歴史と伝統を感じさせる重厚な図書館で、静かに黙々と本を読みノートをとっている学生たちの姿は、大学を象徴するものでした。

しかし、インターネットの発達によるメディア環境の変化とともに、図書館ではコンピュータをつかって情報を収集し、それをもとにして学習課題にとりくむ学生が増えました。また、ひとりで勉強するというよりも、グループで調べものをしたり、意見交換しながらプレゼンの準備をしたりすることもおおくりました。メディアルームやラーニングcommonsは、そのような環境を提供するものです。図書館は、以前のような息苦しいくらい静かな空間ではなくなったのです。とはいえ、閲覧室は以前と変わることのない空間ですが。

では、これから図書館はどのように変わってゆくのでしょうか。

これからの図書館の役割は、学生そして教員・職員のコミュニティをつくりだすことだと考えています。図書館にどんな本や資料を購入するのか、それらをどのように配置するのか、といったこと。話題の本を読んで話し合ったり、自分のお気に入りの本を紹介したり（たとえばPOPというかたちで）、映画の鑑賞会を開いたり、誰かを招いて話を聞いたり、といったこと。それを、学生主体で（もちろん教員と職員が協力して）おこなうことをつうじて、教室以外の、ゼミ以外の、サークル以外のコミュニティの一員になることです。

「サード・プレイス」という言葉をご存知でしょうか。アメリカの社会学者オルデンバーグがつかった言葉です。「第一の場所」は家庭、「第二の場所」は職場（学生の場合は大学）、そして「第三の場所」は無料（あるいは安価）で、人びとが習慣的に集まり、フレンドリーで居心地の良い場所。いろいろな人を受け入れ、会話をたのしみ、「第二の家」のように寛げる場所です。

これからの図書館は、大学のなかの「サード・プレイス」であってほしいし、そのようになると思います。図書館は勉学の場所であると同時に、義務的な勉学から離れて、本や映画と出会い、古い友人・新しい友人と出会い、さまざまな刺激をうけ、気持ちよい時間をすごせる場所となるはずで

図書館を利用する皆さんには、あたらしいスタイルの図書館をつくりあげること

と思っています。こんな本をおいてほしい、こんな映画を見たい、こんな集まりをもちたい、こんな話を聞きたい。なんでもいいですからどんどん意見をだしてください。そして図書館という場を一緒に楽しみましょう。

地下書庫をめぐる冒険

分館運営委員会 副委員長

根本志保子 教授

(環境経済学)

大学の図書館で研究に必要な書籍を探すことを「図書館で本を掘る」と呼んでいる。専門性の高い文献や論文は地下書庫にあることが多かったし、膨大な資料鉦山のどこに「お宝」が眠っているか、たとえ事前に目星をつけていたとしても、実際には掘り進めないとわからないからである。多くの場合、地下書庫は暗く湿っており、誰もいなくて、目的の書棚にたどり着くのに迷う。大学院時代の図書館は、小さな書室がつぎはぎでつながっていて、らせん階段や中階（立つのがぎりぎり）の部屋を上がったたり下がったりしながら、書籍番号を頼りに通り抜ける。映画『薔薇の名前』（1986）に出てくるあの迷路と興奮は（ネタばれになるので詳細は割愛して）、文字通り知のラビリンスにおいて、忘れ去られた「お宝」を自分だけが発見する冒険なのである（閉館？ぎりぎりまでねばってご心配いただくのはショーン・コネリーも私も変わりません…）。

1999年のこと、必要なある研究書の1899年出版の原書を手にとった。経済思想書だったと記憶する。その書籍には、1939年の男性の貸し出し記録が書かれていた。100年間で、借りたのは私で2人目ということになる。60年前、太平洋戦争直前に、こんなすぐには社会に役に立ちそうにない本を借りた人は、何を知りたくてこの本をとったのか。書籍は生き延び、一方、おそらく大学の先輩だと思われるその人はどうなったのか。鉦山洞窟の中で突然、数十年前にそこを通過した探検隊が壁に残した落書きを見つけたような、そしてこの書籍に次に誰かが触れるのは50年後かもしれないと思うと（書籍保存の必要性が問われますね）、私はしばし書棚の間の脚立にすわり、この100年のリレーに思いをはせ、当時から続く知の空気を味わってみた（完全に妄想です）。

今はインターネットの便利な検索システムがあり、論文は自分のパソコンでダウンロードでき、他図書館の書籍も取り寄せればカウンターで簡単に手続きできる。文献探索にかかる時間は格段に減った。本当にありがたい。それでもときどき図書館の地下書庫に本を掘りに行く。地下は閉鎖的で、古い書籍はざらざらし、湿ったにおいがして、生きているものの世界ではない。なぜかとてもくたびれる。それでも図書館地下書庫は鉦山なのだ。目的の書籍を抱えて地上に生還する。そこは明るく、人がいて、もう本当に閉館です、心配していました、とねぎらってくれ（いつも迷惑をかけてごめんなさい）、生きた社会につながっている。本当は、選鉦して精練して、社会に役立つ大論文に磨き上げられればよいのだけれど、今も掘るばかりで大量のぼた山を積み上げ続けています…。

おすすめ本

分館運営委員会 運営委員
渡 邊 賢 一 郎 教授
(国際金融論(英) I・II)

ドキュメント沖縄経済処分 密約とドル回収 軽部謙介著

岩波書店 2012年

皆さんは、沖縄返還を巡る「密約」問題について耳にしたことがあるでしょうか。日本政府は1971年の沖縄返還協定締結の見返りとして米国政府に対して巨額の財政支援を約束しましたが、その存在は、2010年の民主党政権下における調査結果公表まで、長年国家機密として扱われてきました。本著は、返還前に沖縄で流通していた米ドルの処理という政治的に取扱いの難しい問題について、日米政府間でどのような交渉が行われ、最終的に密約の中にどのように組み込まれていったかを詳細に描いています。

本著が提起しているテーマは大きく2つあります。第1に、通貨発行権は国家の基本的機能であり、それは国民生活に重大な影響を与えるということです。沖縄において国家主権が米国から日本に移転するということは通貨発行権も同時に移転することを意味します。本著は、詳細な取材に基づき、ブレトンウッズ体制崩壊の瀬戸際にあった当時の国際通貨情勢の下での密約の意義や、そうした国際経済の大波に翻弄された沖縄の人々の生活に新たな視点から光を当てています。第2に、歴史的公文書の保管・公開ルールの重要性です。実は日本政府が一貫して否定してきた密約の存在に注目が集まった契機は、米国の国立公文書館において沖縄返還関連文書の機密指定が解除され、情報が公開されたことです。本著の内容も少なからず米国の行政文書に依拠していますが、日本ではこの問題に関連する多くの行政文書が既に消失しています。私自身、この密約問題の情報公開において日本銀行の責任者の1人として関与しましたが、国家の重要な意思決定に関する歴史的検証を行うために文書を後世に残すことの重要性を痛感しました。昨今、森友問題などを契機に行政文書の保管ルール見直しが進む機運が高まっていますが、本著は、そうした問題をも提起しています。

なお、沖縄密約問題は、山崎豊子の小説「運命の人」(2009年)の中で、密約取材に絡んで機密漏洩教唆の罪に問われた新聞記者の半生を通してドラマチックに描かれたことで、多くの人々の関心を集めました。こちらも併せて読まれることをお勧めします。

貨幣進化論 「成長なき時代」の通貨システム 岩村充著

新潮選書 2010年

「貨幣とは何か」という問題は、金融論においてもっとも根本的な問いですが、それに答えることは簡単ではありません。本書では、貨幣がどのように作り出され、人類の歴史とともにどの様に変容し、そして今後どこに向かっていくのかについて、学界きつての論客である筆者が独自の視点を交えながら鋭く切り込んでいます。しかし決して難解な専門書ではなく、これから経済や金融を学ぶ初学者にも十分に理解でき、興味が湧く内容となっています。

本書の第1章は、「パン木の島の物語」と題され、太古の昔、まだ貨幣が発明されるずっと以前の時代に「パンの木島」という無人島に漂着した人々の生活が描かれています。その架空の島で起こった様々な物語を読み進めていくと、読者は貯蓄、利子率、貨幣、銀行などの概念の本質を自然と理解することができます。その後、物語は中世ヨーロッパに移り、金本位制の時代やブレトンウッズ体制の世界を経て、貨幣や金融を巡る歴史を辿りながら現代に到達します。そして物語の中には、「歴史に残るバブルたち」、「焼け跡と一銭五厘の旗」など50以上の興味深い小話がコラムとして挿入され、読者の関心を引き付けて離しません。

繰り返される金融バブルの生成と崩壊、国際通貨危機、マイナス金利、仮想通貨の出現など、現在の貨幣経済は大きな環境変化に直面しています。こうした現象の本質をどのように捉えたら良いのか、将来の通貨システムはどのような方向に進んでいくのかに関心を持つすべての読者にお勧めの好著です。

図書館で偶然の出会いを

安藤至大 教授
(労働経済論)

学生の皆さんはどのようなときに図書館に行くのだろうか。例えば、興味のある本や必要な本を借りに行くときかもしれない。また、講義やゼミで求められた報告の準備をするときもあるだろう。そして、空いた時間に雑誌を読みに行くなど、暇つぶしとして利用することも考えられる。これに対して、図書館をほとんど使っていないという人もいるかもしれない。

今の時代、スマートフォンやパソコンを用いてインターネットを検索すれば、私たちは大量の情報に簡単にアクセスすることができる。しかしそれだけでは十分ではない。図書館を使うことにはネットではできない様々なメリットが存在するからだ。以下では具体的に見ていきたい。

まず紙の書籍を読むことのメリットとは、第一に品質保証があることだ。書籍には、その本が作成される過程において多くの専門家が関与することになる。最も重要なのは著者と担当する編集者であるが、出版社の会議をクリアしなければ出版できないし、場合によっては他の専門家による事前チェックを受けている。よって定評のある出版社が出している本は、もちろんある程度の当たり外れはあるが、基本的には信頼できる内容のものだ。

もちろんインターネット上にも、信頼できる執筆者が書いた有用な情報は多い。しかし信頼できない情報もまた膨大であり、どの記事が信頼できるのかを判断することに手間がかかることもあるだろう。また、紙の本とは異なり、後になって内容が書き換えられてしまう可能性があるし記事そのものが消されてしまうこともある。

さて、これだけが理由ならば「紙の本が大事だ」ということであり、図書館を利用する根拠とはならない。それでは街の書店やamazonなどのネット通販サイトを通じて本を購入することと比較したときの図書館のメリットとは何か。それは無料で借りられることだけではない。私が重視しているのは、並んでいる書籍が網羅的であり多様性があること、そして偶然の出会いが生まれることだ。

近頃は書店の経営を維持するのが難しい時代であり、並べられている本は、最近出版されたばかりのものやベストセラーなどに偏っていることが多い。よって少し古い本や珍しい本、また専門的な本は棚にないために注文しなければ手に入らない。これに対して大学の図書館などでは過去からの蓄積で多くの書籍にすぐにアクセスできる。

もちろんamazonなどネット書店では、非常に多くの書籍を取り扱っている。しかし必要な本を検索することはできても、偶然の出会いはまだまだ少ない。

図書館で本を探すことを想像してみよう。テーマ別に分かれた開架エリアでお目当ての本を手取るためには館内を移動する必要があり、それだけで非常に多くの本が自然と目に入ってしまう。またお目当ての本の周辺に並ぶ本も視界に入る。そして書名や背表紙のデザイ

ンなどが気になったなどという理由で、思いがけず面白い著者や本と出会うことができる。図書館を最大限に活用するためには、こうした偶然の出会いを活かすことが求められる。

セレンディピティという概念がある。これは偶然の出会いや発見を意味するものであるが、科学上の大発見がしばしば偶然によるものだという逸話に関連して使われることが多い。ただしこのような偶然の出会いや発見は努力せずに運だけで得られるものではない。実際に、フランスの細菌学者であるパスツールは「偶然は構えのある心にしか恵まれない」という名言を残している。

せっかく視界に入った本があっても、その重要性に気づかなければ意味がない。そのためには、大学で学ぶ内容だけでなく新聞や雑誌で目にした記事、また日常生活で感じる素朴な疑問などを流してしまわずに、頭の片隅にとどめておくことが必要だ。それが小さなフックとなって目に止まった本を手にとることに繋がり、結果として知識の幅と深さが増していくことになるだろう。

これからはAIの発達などにより、人間にしか出来ないことが重要になっていく。大学において知的な基礎体力を身につけることの重要性は日増しに高まっている。そのためにも学生の皆さんには図書館を活用し、偶然の出会いを楽しんで頂きたい。

おすすめ本

奥田 智 教授
(教職実践演習)

(1) 学力の経済学 中室牧子著

ディスカヴァー・トゥエンティワン 2015年

最近、一部の自治体では全国学力・学習状況調査結果と教員の手当を連動させる動きがありますが、どうすれば子どもたちの学力が上がるのかは、教育に関わる者にとっては永遠の課題だと思います。本書はその課題にエビデンスを用いて教育を経済的に分析しています。例えば「テストでよい点を取ればご褒美」と「本を読んだらご褒美」どちらが効果的かについては、ハーバート大学のフライヤー教授のご褒美実験結果、教育を成果主義にすることによって教員の質が上がるのかについては、アメリカのイリノイ州で行われた「ボーナスを得るまたは失う実験」を紹介しています。それ以外、少人数学級の効果、いい先生とはどんな先生等についても、エビデンスをもとに述べられています。教育を経験や情熱で語ってきた私自身にとってある意味新鮮な本でした。

(2) 東大生となった君へ 田坂広志著

光文社新書 2018年

本書において特に注目したのが第3話「東大卒の半分以上が失業する時代が来る」でした。実社会で「活躍する人材」になるためには、「基礎的能力」「学歴的能力」「職業的能力」「対人的能力」「組織的能力」の5つの能力が示され、東大卒の人は「基礎的能力」「学歴的能力」については優れていることが保証されているがそれ以外の能力は未知数であるとし、AI社会が間もなく到来する中で「基礎的能力」「学歴的能力」はAIに取って代わられるであろうと述べています。「職業的能力」「対人的能力」「組織的能力」をしっかり身につけておかなければ東大生であっても生き残れない時代がやってくるとも述べられています。

逆に考えれば東大生でなくても、「職業的能力」「対人的能力」「組織的能力」を大学時代にしっかり身につけたものは「活躍する人材」になりえるということだと思います。大学時代にいろいろなことに挑戦し、学内外の人々と関わりを持ち、知識や技能のみならずコミュニケーション力やプレゼンテーション力等を身につけましょう。

私のおすすめの本

橘 光伸 教授
(租税法)

- (1) 人工知能は人間を超えるか ディープラーニングの先にあるもの 松尾豊著
角川 EPUB 選書 2015 年

その後の日本での AI ブームの先駆けとなった有名な本なので、読まれた方も多いと思う。過去の 2 度の AI ブームの歴史を概観しつつ、今回のブームの肝である「ディープラーニング」について、専門知識のない人にもわかるように説明している。この分野を勉強する際に初めに読むのに適した本だと思う。

著者の松尾氏はわが国の人工知能研究のフロントランナーで、本書出版後、NHK の AI の特番に出演するなど、引っ張りだこの状態である。私が公務員をしていた時には、財務省の省内セミナーの講師としても話を聴講させていただいた。

AI やディープラーニングは、産業分野でも大きな利用可能性をもった技術であり、それを発展させるには、企業のトップが決断して（社内に抵抗があっても）他社に先んじて資源を投入して利用を推進することが大事で、そうすれば日本にもチャンスはあるという話だったと思う。しかし、その後の日本の産業界の動きは敏速とは言い難く、早くも敗戦ムードが漂っているのは残念である。

日本のように資源のない国で、次の世代が食べていく飯のタネをどこから生み出していくのか。現下の有効求人倍率が上がったと言って胸を張るのもよいが、そういう新しい活力の源泉を生むような環境を作るのも、政・官・財界のリーダーの地位にある者たちの責務だと思うのだが。

- (2) わかったつもり 読解力がつかない本当の原因 西林克彦著
光文社新書 2005 年

文章の読解に関する研究は、前世紀末頃から心理学の研究成果を取り入れることで、大きく進化してきたように思われる。著者は、学習心理学等の著書の多い研究者であるが、認知心理学の知見や教室での実証実験等の成果も踏まえ、刺激的でわかりやすい文章読解論を展開している。

わからない部分が見つからない安定状態が深い理解を阻害するので、この安定状態を克服することでより深い読解が可能となる、ということをも多くの文例を用いて説明している。

もう 10 年以上前に出版された本だが、これまでの現代国語教育に物足りなさを感じていた私としては、初めて読んだ時に大きな感銘を受け、それ以来、折に触れて紹介している。文章理解のための第一歩として、若い方に読んでもらいたい本である。

(3) 茨木のり子詩集
石垣りん詩集

岩波文庫 2014年
岩波文庫 2015年

仕事では、わかりやすさとか味わい深さとは対極にある税法の条文を読んでいるので、仕事を離れた時はよく詩集を読んでいる。日本語のリハビリが必要なのである。

詩の本は大きな書店にしかコーナーがなく、しかもすぐに絶版になってしまうので、オリジナルの詩集を読むには図書館のお世話になるしかない。そんな状況下で、近年、岩波文庫が戦後の主要な詩人の選詩集の発行を続けているのは喜ばしい。谷川俊太郎、茨木のり子、辻征夫、石垣りん、大岡信、山之口獏と錚錚たる名前が並ぶ。中でも、私が特に惹かれるのは茨木のり子と石垣りんの女性詩人二人である。

戦後、男女平等の世となり参政権も与えられたが、女性が社会的に活躍するには様々なガラスの天井があったに違いない。そうした中で、最も女性が活躍している分野の一つが文学、それも韻文の世界ではないかと思う。戦後の詩や短歌の最良のページは、女性によって綴られているように感じられる。

茨木と石垣は、育った環境も作風も対照的なのだが、代表作とされる「自分の感受性くらい」（茨木）とか「表札」（石垣）などを読むと、一種の男前なきっぷの良さ、凜とした姿勢という点は共通していて気持ちが良い。

女性はもちろん、草食系の男子諸君も読んで叱咤激励されてみてはいかがでしょうか。

2018年度のまとめ

○利用数

入館者数 228,715 名

貸出冊数 12,525 冊

○新規導入コンテンツ

2018年度に新しく導入された、オンラインデータベース・電子ジャーナルの一覧です。図書館ウェブサイトからご利用ください。

・ **Building Types Online**

建築デザインの研究・実践に関する英語のコンテンツを提供するオンラインデータベース

・ **Cambridge Journals Digital Archive(CJDA)**

Cambridge University Press 社発行のジャーナルバックファイルのうち Mathematics and Computer 分野と Physical Sciences 分野の 57 タイトルが利用可能

・ **National Geographic Virtual Library**

米国ナショナルジオグラフィック協会の機関誌『National Geographic』の全号と『National Geographic Traveler』他、同協会発行の書籍、地図、画像、動画等を提供するデータベース

・ **化学書資料館**

日本化学会が編集している化学便覧、実験化学講座、標準化学用語辞典のオンライン版

・ **理科年表**

国立天文台編集の科学の全分野を網羅するデータブック『理科年表』のオンライン版

・ **三田文学 オンライン版**

『三田文学』の創刊号から戦争による中断までの刊行分、全 397 冊を完全収録したデータベース

・ **日本近代文学館所蔵 太宰治自筆資料集**

太宰治の直筆原稿、草稿と、その他断片・草案とそれらの初出誌紙、旧制中学・高校時代の自筆資料等を収録したデータベース

○ガイダンス

- ・4月から6月にかけて、基礎研究図書館ガイダンスを92クラスの学部新生を対象に行いました。(アンケートは後にまとめましたので、ご確認ください。)
- ・専門研究図書館ガイダンスを大学院の新生34名に行いました。
- ・4月に新任教員図書館見学を行いました。
- ・その他、ゼミナール単位のガイダンスやOPACガイダンスを行いました。

○選書ツアー

- ・7月31日(火)13時から16時30分に経済学部単独の選書ツアーを三省堂神保町本店で開催しました。参加者は10名で、テーマ選書と自由選書を行い、グループで決めた代表者が発表し、投票と表彰を行いました。
- ・11月10日(土)13時から17時 紀伊国屋書店 新宿本店で開催しました。理工学部、薬学部との合同開催で、経済学部からの参加者は6名でした。所属学部に置きたい本と他学部生にお勧めしたい本をそれぞれ選び、書店担当者によるPOP作成講座を受けて、各自が他学部生にお勧めしたい本のPOP作成を行い、POPの優秀賞等の賞を決定しました。

○展示

平成30年11月17日(土)～平成31年3月23日(土) 法学部分館で、法学部と経済学部の共催の展示『ジョン・ロー コレクション展』が開催され、経済学部からは下記の3点を出陳しました。(※ジョン・ロー(1671-1729)とは、フランスで銀行設立などの活動をしたスコットランドの財政家です。)

- ・ Poesies diverses, sur les heureuses operations de Monsieur Law, (詩集 (写真))
- ・ John Law, Scottish Banker, Autograph letter (書簡 自筆サイン (写真))
- ・ ジョン・ローの研究 / 吉田啓一著 -- 泉文堂, 1968.9.

経済学部の図書館では、『芥川賞・直木賞受賞本』『本屋大賞受賞本』『日経経済図書文化賞受賞図書』『オープンキャンパス公開講義関係図書』『選書ツアーで選ばれた本』などの、時々のテーマで展示を行っています。本は貸出ししていますので是非ご利用ください。

○学生協働

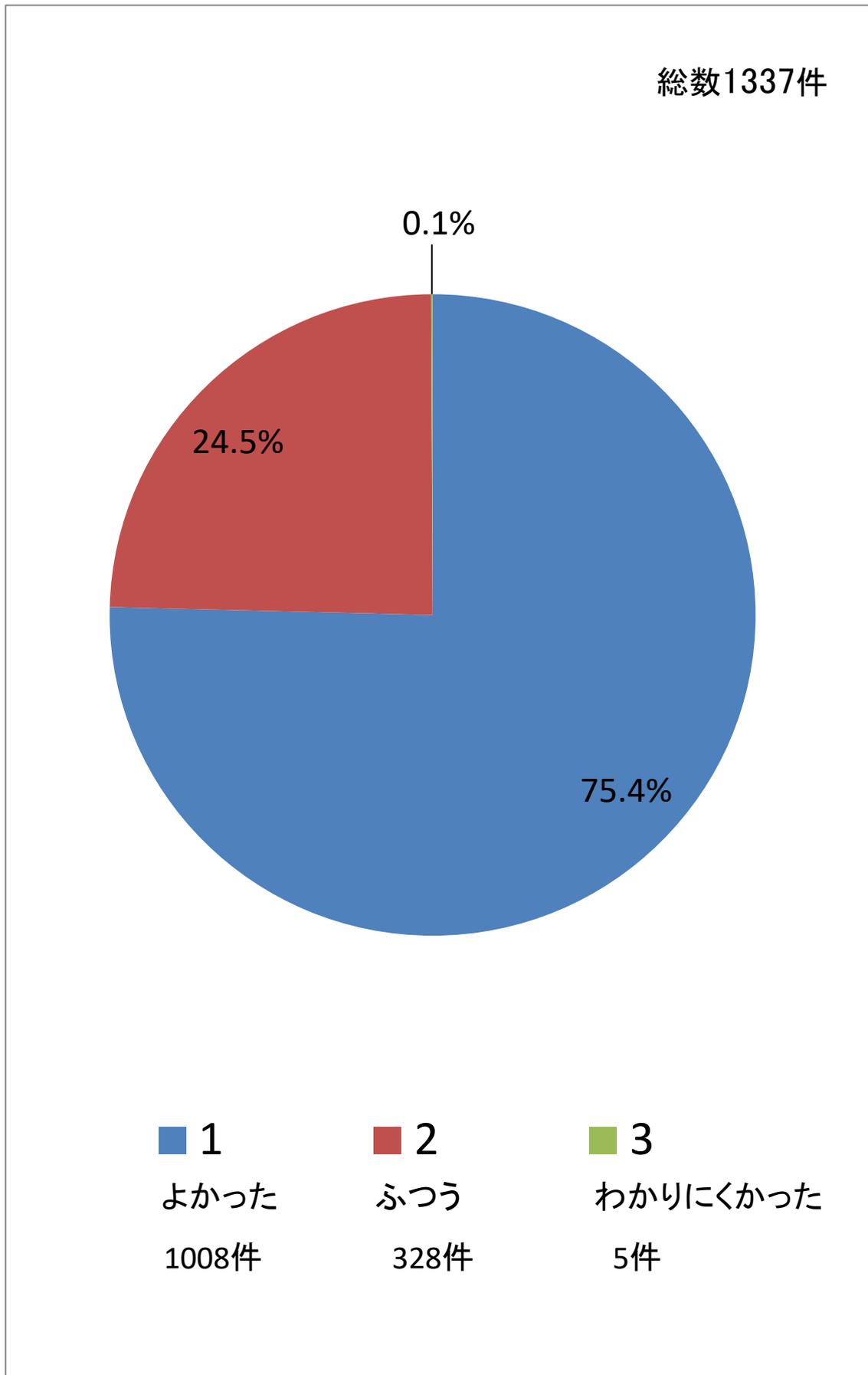
図書館サークルの学生と図書館が協働し、先生方の協力をいただいて、公開ゼミなどの各種イベントを開催しました。

- ・ 4月17日（火） 18時から20時
「シャーロックとは誰か」（杉藤久志准教授）
- ・ 4月27日（金） 18時から
「ヘンリー八世の私生活」（松本純准教授）
- ・ 5月23日（水） 18時から20時
「わたしは、ダニエル・ブレイク」（金田耕一教授）
- ・ 5月29日（火） 18時から19時30分
「星新一作品を読むーショートショートの世界」（図書館サークル）
- ・ 6月13日（水） 18時から19時30分
「365日のシンプルライフ」（図書館サークル）
- ・ 6月20日（水） 18時から20時30分
「“Burn！”砂糖と帝国 イギリスにおけるカリブ支配と大西洋三角貿易」（山下雄司准教授）
- ・ 6月27日（水） 18時から20時
「くずし字で遊ぶ」（佐藤温専任講師）
- ・ 7月4日（水） 18時から20時45分
「日本映画と戦争 アニメ『この世界の片隅に』が描かなかったもの」（坂野徹教授）
- ・ 11月14日（水）・11月20日（火）
「ゼミ紹介（補講編）」（図書館サークル）
- ・ 12月11日（火） 18時から20時
「卒業論文発表会」（図書館サークル）

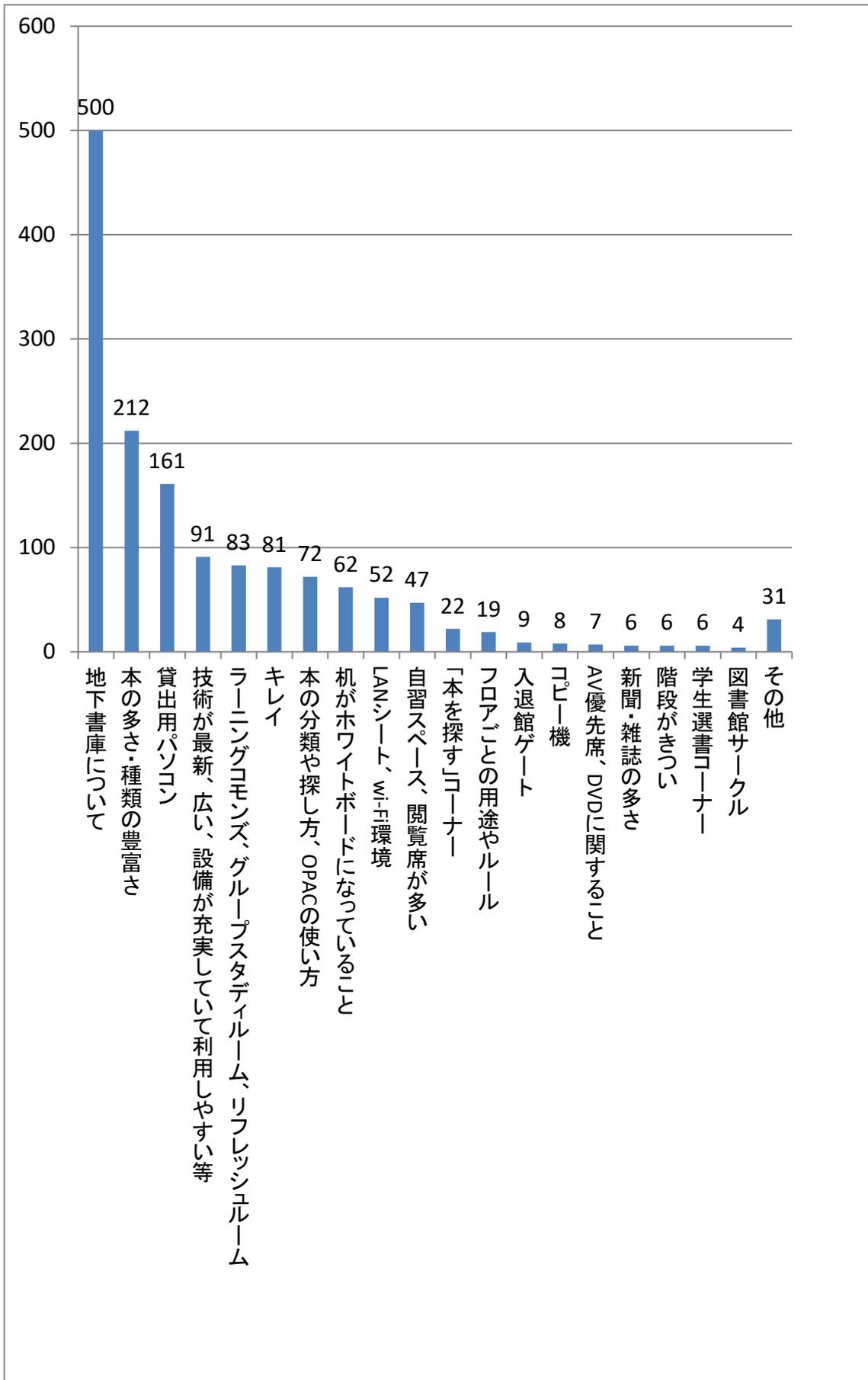
○高校生図書館開放

8月1日（水）から9月12日（水）の期間に高校生へ図書館を開放しました。図書館のウェブサイトとオープンキャンパスでの告知、近隣の高校への広報活動、千代田図書館と千代田区掲示板へのポスター掲示を行い、のべ206名の来館がありました。

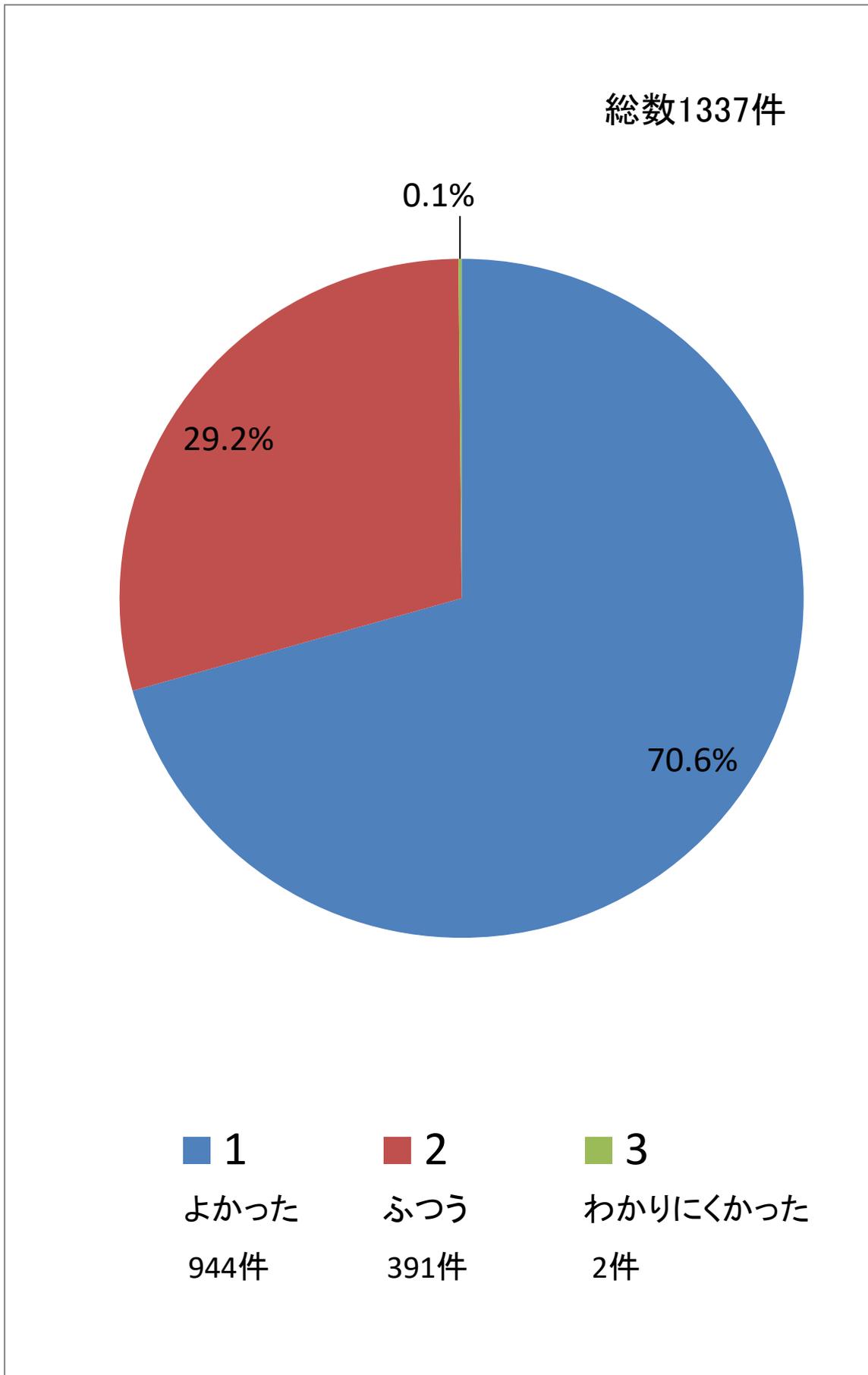
1. 館内見学について



2.館内見学で記憶に残ったことは何ですか。

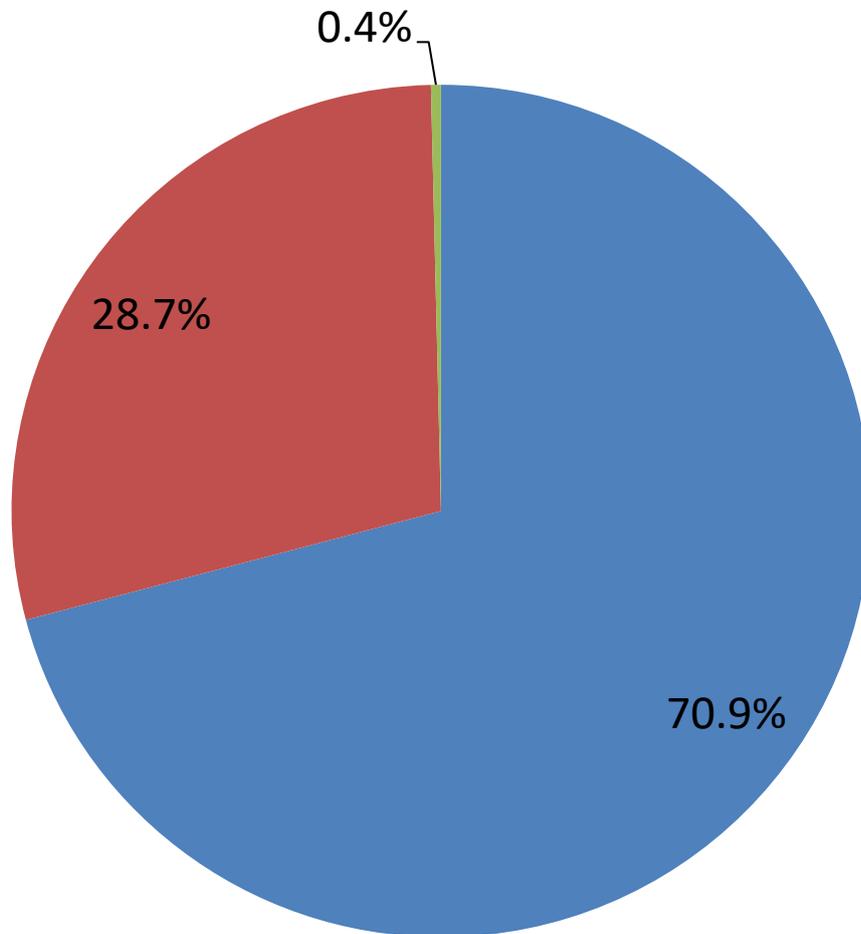


3. 図書館4F「本・雑誌をさがす」について



4.図書館5F「本をさがす」について

総数1336件



■ 1

よかった

947件

■ 2

ふつう

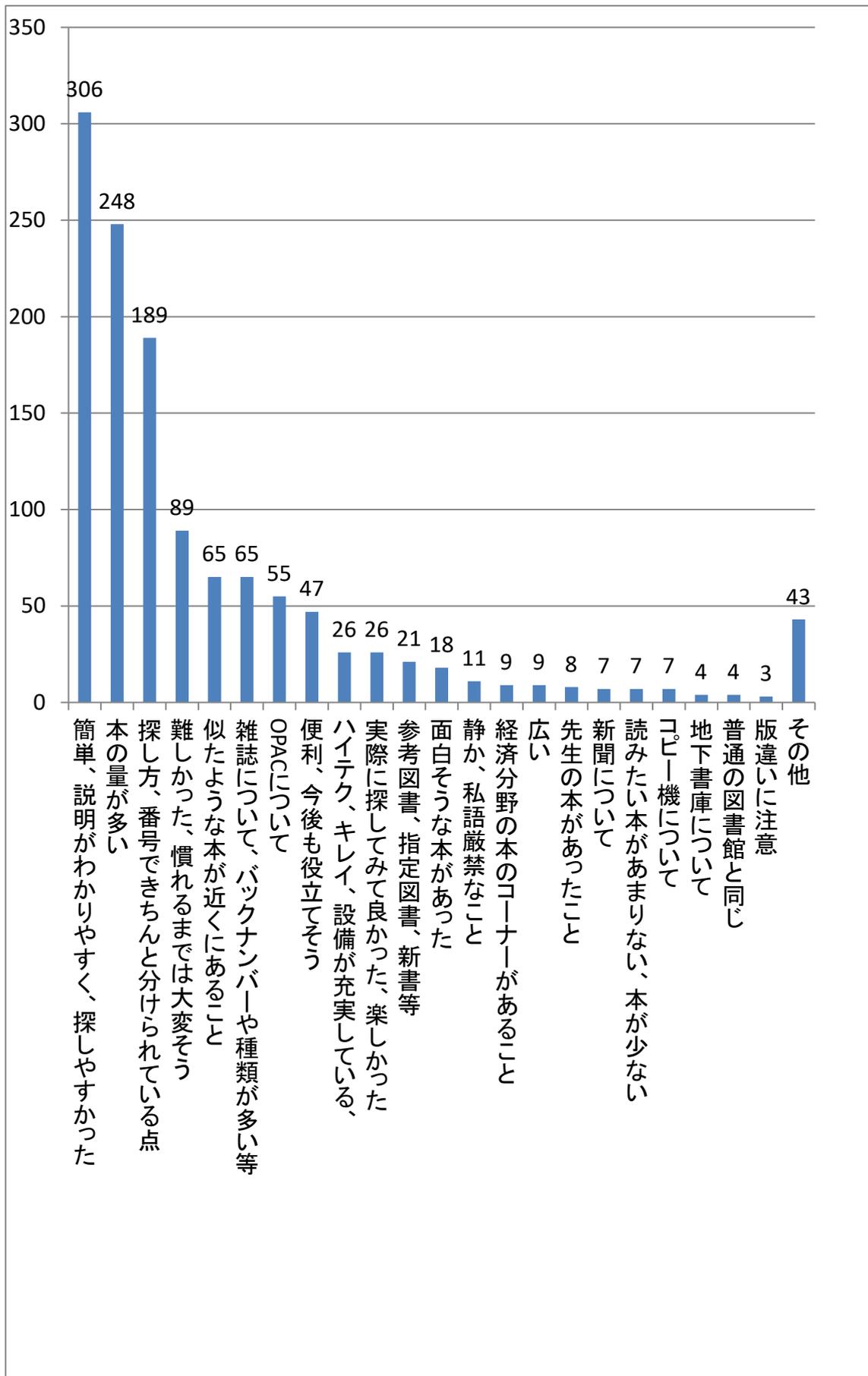
384件

■ 3

わかりにくかった

5件

5. 4F, 5F「本・雑誌をさがす」を体験して記憶に残ったことは何ですか。



6. 図書館ガイダンスへのご意見、図書館へのご要望があればお願いします。

